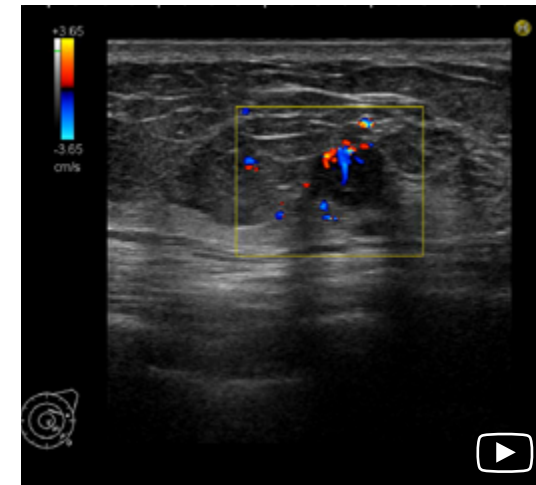
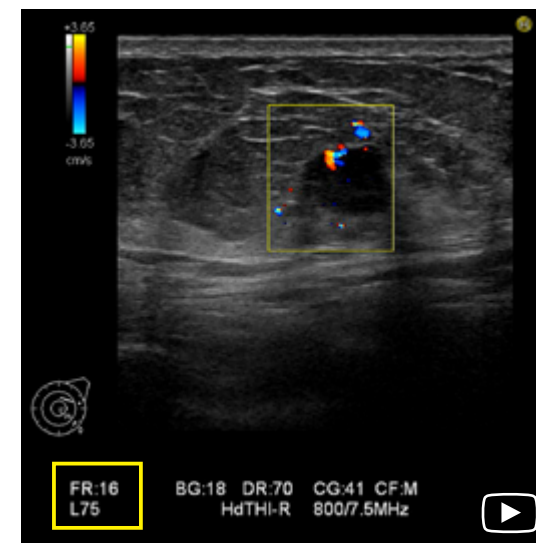


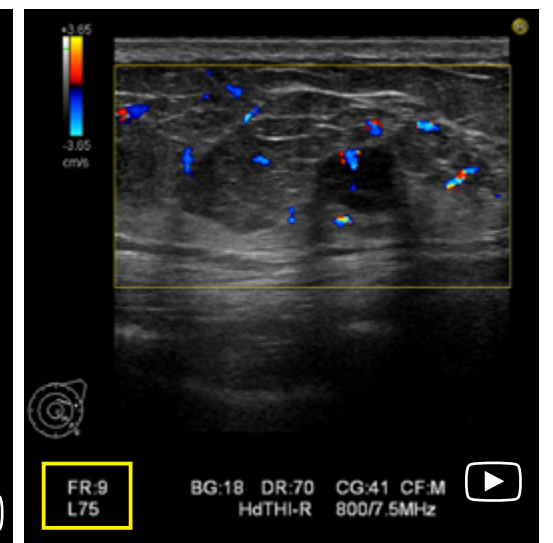
カラー表示エリア (ROI) のサイズによる画像の違い



A : 適正な ROI サイズ



B : ROI サイズ過小



C : ROI サイズ過大

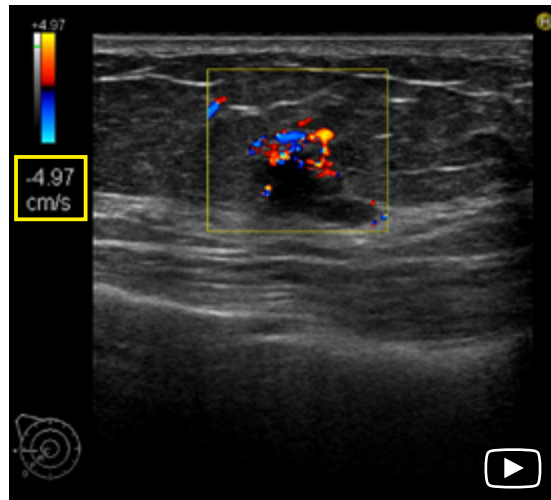
ここがポイント ROI は病変よりやや大きめに設定する

A : 適切なカラー表示エリア (ROI) は、目的とする病変の辺縁から 5 ~ 10mm の余裕を持った大きさです。

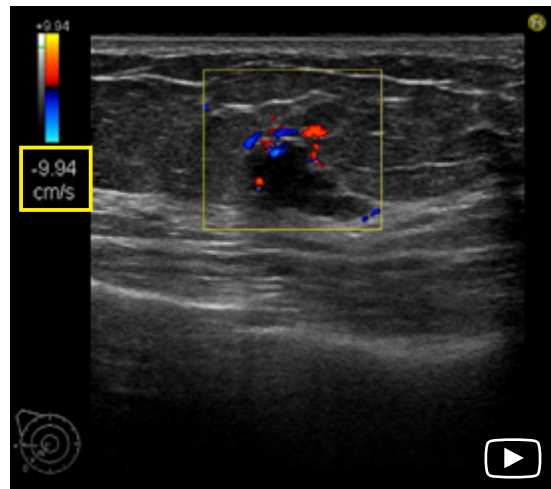
B : ROI を小さく設定すると、病変周囲の血流情報が得られません。

C : ROI の設定が大きすぎると、血流感度が落ち、フレームレートも低下します。

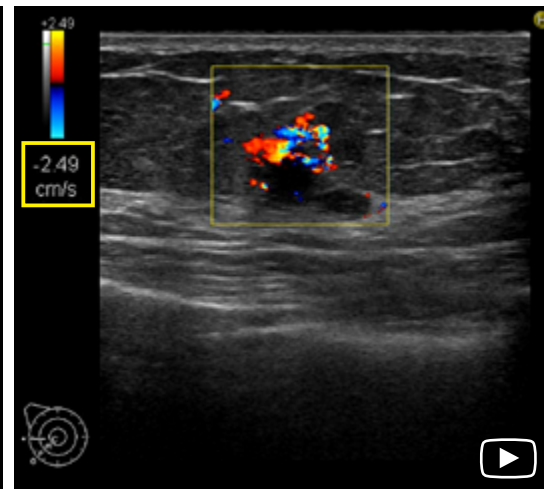
速度レンジによる血流感度の違い



A: 適正な速度レンジ



B: 速度レンジ過大



C: 速度レンジ過小

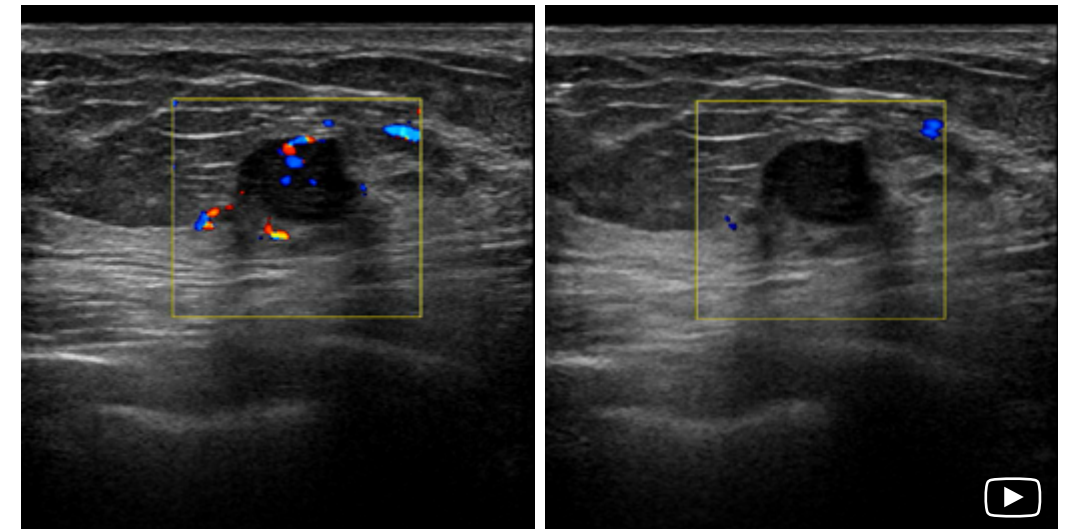
ここがポイント 低めの速度レンジから観察を開始する

A: 乳腺病変の血流は低流速のものが多いため、3～5cm/sec以下の低めの速度レンジで観察を開始します。この病変には4.97cm/sec程度が適しています。

B: 速度レンジを9.94cm/secと高く設定すると、それより遅い流速の血流は表示されず、血流が乏しいと判断されます。

C: 速度レンジを2.49cm/secと低く設定しすぎると、それより速い血流は逆方向に表示され(折り返し現象)、正確な血流形態の評価ができません。

探触子で加える圧による血流の違い



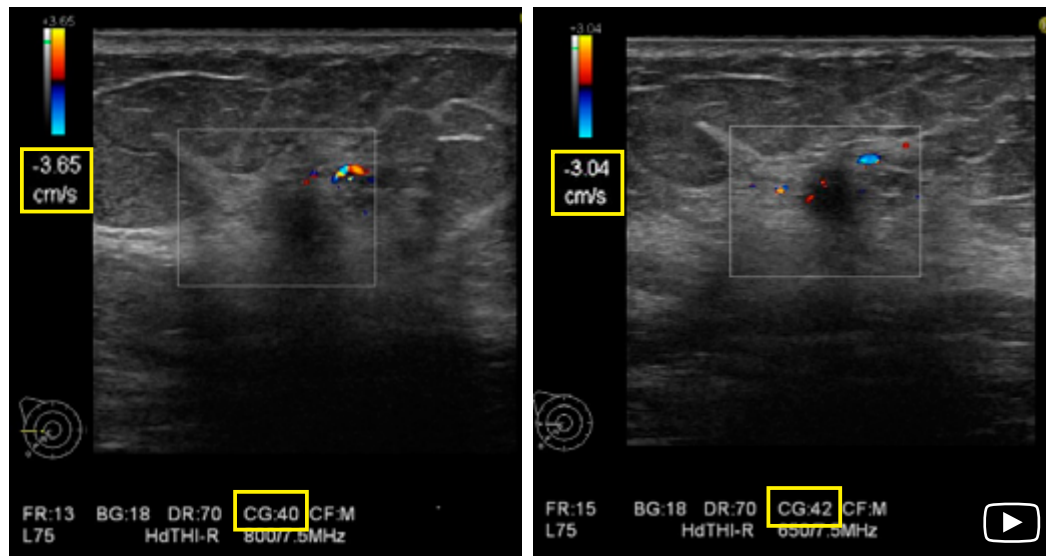
適正な圧

圧が強すぎる

ここがポイント 浅い位置にある病変は圧迫しすぎない

病変を探触子で強く押し付けることにより、駆血され、血流が乏しく表示されてしまいます。特に浅い位置にある病変は、探触子で加えられる圧の影響を受けやすく、注意が必要です。逆に深部にある病変に対しては、少し圧を加えたほうが、血流感度が上がることもあります。

速度レンジ、カラーゲイン調整による違い



A : 速度レンジ 3.65、カラーゲイン 40 B : 速度レンジ 3.04、カラーゲイン 42

ここがポイント 速度レンジ・カラーゲインを調整して血流の有無を確認する

A : 速度レンジ 3.65 cm/sec、カラーゲイン 40 では腫瘍内に血流を認めません。

B : 速度レンジを 3.04 cm/sec に下げ、カラーゲインを 42 まで上げると、腫瘍内にわずかですが血流を認めます。

速度レンジ、カラーゲインを調整し、本当に内部に血流を認めない病変なのか、確認しましょう。